26

大正期学校衛生史の研究（四）
石原喜久太郎

杉浦守邦
京都蘇生会総合病院

明治期の学校衛生の特徴は、一言で言えば環境衛生重視の学校衛生であった。身体検査においても人類学的見地から日本人の児童はどういう発育傾向をたどるかを明らかにしようとするものであった。したがって学校医を全小学校に配置するという世界に先立つ制度を敷いたが、その主たる任務は学校施設の衛生的監視であり、身体検査も体格判定を主とするものであった。

大正期に入ってから個別の児童に見られる疾患対策を中心とする学校衛生に転換するのであるが、この推進役を演じたのが石原喜久太郎（一八七二～一九二九）である。

彼は島根県松江市出身、東京帝国大学医学部を卒業後衛生学教室に入り、細菌学を専攻した。明治四三年文部省の学校衛生取調嘱託を委嘱されたが、明治四四年ドイツのドレスデンで開催された万国衛生博覧会に文部省が出品物を展示することとなったとき、その責任者として渡欧した。会期中ドイツの学校衛生学者と交流する間に当時ドイツに興りつつあった虚弱児、病弱児の養護を主とする学校衛生施策に強い示唆を受けた。帰国後文部省当局に学校医を対象とする学校衛生講習会の開催を進言し、大正三年から六回にわたって開催した。その主任となって学校医の意識の啓蒙に務めるかたわら、全国的に学校医等の講演会、協議会に出席して学校衛生改革の気運の興隆に務めた。

また一方明治期に制定された学校衛生法規が時勢に適さないことを論じ、その改訂を強力に提唱した。大正九年「学校医職務規程」が改正されたとき、その職務の一つに「病者、虚弱者、精神薄弱者ノ監督養護ニ関スル事項」が追加されたこと、又同年「学生生徒児童身体検査規程」の改正にあたり、検査にあたって注意すべき疾患のなかに、「屈折異常」が入り、また「肋膜炎、心臓疾患及び機能障害、伝染性皮膚病、腺様増

殖症及び扁桃腺肥大、ヘルニヤ、精神障害」等が加えられたこと、さらに「継続的ニ監察ヲ要スト認ムル者」を「要監察」と判定し、事後指導の徹底を図ることを求める等の条項が追加されたことは彼の構想の具体化であった。

このような疾病重視政策への転換は、今までの内科医、小児科医中心の学校衛生に加えて眼科医、耳鼻咽喉科医、歯科医等の学校内への積極的進出を促すこととなり、眼科医の近視の予防指導、耳鼻咽喉科医のアデノイド・肥大扁桃の摘出切除、歯科医の初期齲歯の処置、六歳臼歯の校内抜去等が行なわれるまでになり、大正時代は学校診療全盛時代とまで言われるようになった。

又彼が宣伝に努めたドイツの林間学校、フェリエンコロニーなども日本に移植され各地に林間学校、海浜学校など夏季児童保養施設が設立されていった。当時虚弱児、腺病児対策が結核予防に最も効果的とされる時代であったから、医師のなかにも自費を投じてこのような児童保養施設を開設するものが輩出したが、これもこの時代の特色である。

石原は、文部省に学校衛生官制度が設けられたときこれへの就任を勧められたが辞退し、大正八年伝染病研究所の技師に転出した。以後も細菌学研究に専念したが、昭和四年現職のまま没した。著書に「石原学校衛生」がある。